

カナダと中国

日本にとっての今日的な意義

はじめに

本日は、このような機会にお招きいただき、どうもありがとうございます
いました。一橋経営研究会の皆様、特に、朝海大使に御礼申し上げます。
ます。

私は中国の歴史や外交政策の学者ではございませんし、日本に関する
専門家でもありません。中国で4年間、日本で17年間、カナダの
ために働く機会にめぐまれた外交官です。その間、主にカナダとの
関係において中国と日本を理解しようと努めてきました。本日は皆
様に、カナダと中国の関係を理解していただくために、ちょっと変

違った見方をご紹介したいと思います。それは、外交政策が抽象的な原則や理論ではなく、いかに国益に左右されるものかという実例です。ただし、これからお話しすることは、全く個人的な見解であることを強調しておかなくてはなりません。

後ほど、阿南惟茂大使がお話されるとうかがっております。彼は真の中国専門家です。私とはまた違った見方をされると思いますので、中国という偉大な国について、また私達カナダ人と日本人にとって中国がどのような存在であるかということについて、皆様の視野をさらに広げてくださることと思います。

グローバル化と中国

グローバル化と中国、このような広い視野というのは重要です。なぜなら、21世紀初頭の大きな特徴の一つは、中華人民共和国が世界

に与える影響を十分に理解する必要があるからです。

一世代前には、このようなことを言う人はいなかったでしょう。中国の台頭があまりに急であったために、一見、限りなく増えている様々な機会を喜ぶ楽観論と興奮が広まっていますが、その反面、今後どのような影響が広がるかについて、不安も広まっています。

おそらく中国は、伝統的な国でありながら急速な経済成長が続いたために、世界の舞台に押し出され、日本や韓国、台湾が経験した経済成長を多くの点で繰り返すことになったと考えられます。しかし、これは部分的な見方に過ぎません。大部分の人は、中国の突然の台頭には多数の例外的な特徴と原動力があり、そこに独特の重要性があると考えています。こうした見方によれば、中国独自の特徴を持った成長が生み出す課題も、また独特のものであると言えます。この点からも、私は大部分の人の考えが正しいと思っております。

す。

カナダの国と国民は、140年という非常に短い歴史を経て現代にいたるまでの間ずっと、グローバル化と変革の時代を生きてきました。

グローバル化とは変化を意味します。その原動力は大陸規模の交流や、モノ、資本、技術、労働力、そして思想や願望の交換です。そう考えると、グローバル化の歴史は、2、3百年にわたるものです。その間に起きた影響は劇的なものであり、ときには痛みを伴います。

戦後のブレトンウッズ体制と貿易自由化は、グローバル化の基礎を築きました。具体的には、多国籍企業、モノとサービスの世界規模の貿易、発展途上国で製造業が出現し、それに伴い先進国では、よ

り価値の高いモノの製造とサービスの向上、そして情報通信技術革命などが起こりました。

中国はこうしたグローバル化の波がなければ、今日のような台頭を見ることはなかったでしょう。

また、グローバル化という視点に立たなくては、カナダの中国との関係を理解することができないでしょう。

カナダと中国

「地理は運命を左右する」というのは、2600年前に古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトスが語った有名な言葉です。日本はアジア大陸の延長にあり、常にアジアと密接なつながりがありました。日本とは異なり、新しい国カナダは、広い太平洋を越えた遠い北米大陸に

あります。15世紀のヨーロッパ諸国の探検により、ついに世界地図が作られ、太平洋を越えたつながりが出来るようになりました。このようなつながりは21世紀にはさらに多くの発展を可能にすることでしょう。

中国と日本の関係の中心には、地理的に近いという根本的な現実があります。これに比べ、カナダと中国の関係、及び中国のカナダに対する期待は、二国間の距離とその関係の目的に左右されています。ある意味で、カナダ人と中国人は最初から太平洋を渡り、相互関係を築く道を選んできました。私達の間を決定する要因と推進力は不変です。中国はたえず海外へ拠点を広げ続けており、カナダは移民とますます多くの労働力を必要としています。また、両国は貿易と交流を通して生活水準をたえず向上させたいと願っています。現代社会には本来、思想、ときにはイデオロギーを伝え、交換したいという欲求があります。また、現代国家には外交を行う責任

があるため、歴代の政府も外交政策を推進する役割を果たしています。

カナダが中国との関係を持つようになったのは、北米とアジア間(かん)の人の動きが可能になった時からです。最初は、商業が交流の手段でしたが、まもなく西洋人はキリスト教の布教を通して「中国を救う」という欲求に駆り立てられるようになりました。中国人の生活が西洋化されるようになった19世紀末から20世紀初めには、多くの教師や教育機関がカナダから中国へ向かいました。日本へ来た人々とほぼ同様に教育を広め、学校や大学を建て、さらにはビジネスを行うために人々は中国へ渡ったのです。その後、両国に通商事務所ができ、正式な国交が始まり、公式な二国間関係がカナダと中華民国との間に樹立されたのは1941年のことでした。

カナダと中国の関係について一般論を述べるには、政治的な理由で

中断された歴史を認める必要があります。特に、アジアにおける世界大戦の影響と1949年の中華人民共和国設立後の10年間です。しかし長期的に見ると、政治の影響は国益の影響より小さく、歴史の流れを決定するのは、政治よりも国益の方がより強いことがおわかりになるでしょう。

移民

まず、カナダと中国の関係において人の動きが果たす重要な役割について、ご説明させていただきます。この点は、カナダの中国との関係が日中関係と明らかに違う点です。

漢民族が現在の中国へ到着したのは、宋王朝の時代でした。しかし、中国人の動きは現在の中国の海岸で止まることはありませんでした。漢民族は移民により国外へ広がって行きました。東南アジア

へ進み、南アジア、さらにアフリカへ向かい、ついにはアメリカ大陸へ到着しました。中国人の大々的な移民は特に、北米とオーストラリアへの労働者の移住で、19世紀の植民地時代にピークに達しました。

日本の「魏志倭人伝」は、当時の日本人と漢民族との出遭いを記した最古の記録の一つで、それはほぼ2千年前の出来事です。中国がカナダと出遭ったのは、わずか200年余り前のことで、1788年に50人の中国人の鍛冶屋や大工が、小さな要塞や帆船を作るために、マカオや広州からバンクーバー島へ連れてこられました。

19世紀半ばに、カナダ西部のフレイザーバレーで金が発見されると、金鉱で働き、道路を造る労働者となるために、何千人もの中国人がカナダへやって来ました。1860年には、ブリティッシュ・コロ

ンビア州にすでに7000人の中国人がいたのです。

1880年代になると、カナダ太平洋鉄道の建設のために中国人労働者の第二の波が押し寄せました。彼らは今日(こんにち)、日本の観光客がバンクーバーからバンフへ旅行するときに使っている、そのルートを建設したのです。1882年には、はカナダの労働者の3分の2は中国人でした。

このような中国人の動きは、過去数十年続いています。毎年カナダへ移民する4万人の中国人は、もはや労働者ではありません。多くの場合、カナダの国造りを助ける技能を持った学生や専門家です。移民は、カナダの人口増加と経済成長の最も強力な駆動力の一つとなっています。労働者不足の解決は、カナダが現在直面している最も大きな課題の一つです。中国人は勤勉で献身的な優れた人々です

から彼らがカナダを移住先として選んでくれるおかげで、カナダはより強い国になることができます。

そのため当然のことながら、これらの移民を引き付けることが、カナダの中国に対する外交政策の優先事項の一つとなります。これは、外交政策が国家統治の最も基本的な目的を達成するための手段となる良い一例です。その目的とは、経済の構築とカナダ国民の生活水準の向上です。北京にあるカナダ大使館には300名を越える職員がおり、その3分の1はビザと移民を担当しています。カナダにとって、これは実際に執行(しっこう)されている外交政策であり、日本の外交政策とは大変異(こと)なっています。

貿易と経済

カナダと中国の関係の第二の柱は経済です。19世紀と20世紀初めの

市場経済の動きと自立的な商業活動は、中国をカナダと結びつける機会を提供しました。海上輸送の拡大と蒸気船の就航により、人の動きと同様、モノの取引が活発になったのは、ごく自然の成り行きでした。

1949年の政治革命と冷戦の結果、中国はカナダを含むその他の世界との接触を大きく制限することになりました。カナダが商業関係を再開する決断をするには、冷戦の環境と対米関係を考慮に入れなくてはなりませんでした。カナダ国民は対米関係の維持と発展を継続する必要性を十分に認識しています。しかし、たとえ米国の承認がなくても、国益を満たすのであれば、そうした政治的な決断を支持することもあるのです。

1950年代の末、ディフェンベイカー首相の率いる保守党政府は、カナダから穀物を購入したいという中国の提案を前向きに検討する決

断をしました。長期にわたる討議の末、1959年、カナダは中国へ穀物を売ることに同意しました。1960年には穀物の信用取引販売を始めました。米国はこの決定を支持しませんでした、カナダは実行しました。

さらに米国は、カナダの中華人民共和国と外交関係を結ぶ1970年の決定にも反対しました。

しかし、こうした決断により通商関係が開かれました。2006年に中国は日本を追い抜き、米国に次ぐカナダ第二の貿易相手国になりました。現在、中国は日本より多くのものをカナダから購入しており、そのカナダへの輸出額は日本の3倍に達しています。

世界第8位にランクされるカナダの経済は、資源やエネルギー、ハ

イテク、先端農業や食品加工、サービスなどの分野から成り立っています。この構造は近代化の最中にある中国の多くのニーズを満たすものです。同時に中国はカナダ国民に手ごろな価格の消費財を提供し、とりわけインフレ圧力を抑えるのに役立っています。カナダと中国の二国間貿易総額は2007年に、500億カナダドルを越えました。

カナダは中国との貿易を市場の判断にゆだねる自由貿易の方針を堅持しています。冷戦という世界情勢にも関わらず1960年代に中国との貿易を開始して以来、二国間のモノとサービスの流れを政治的に利用することも回避してきました。1989年の学生デモに対する中国共産党の弾圧とそれに続く天安門事件にカナダ国民は大変驚きました。カナダ政府は、中国政府との交流を大幅に減らすと同時に、政府開発援助を通じた関係の拡大を制限しました。しかし、貿易と経

済関係に対する制約を課すことはせず、これらは冷めた関係の影響を受けことなく続きました。

経済関係にも構造的な問題がないわけではありません。日本や他国の人々と同様、カナダ人も製品の品質に懸念を抱いています。また、資源やエネルギーなど、慎重な取扱いを要する分野への中国の投資の可能性にも神経をとがらせています。カナダは2億5、000万カナダドルを越える投資の提案については、毎回審査を行っています。大規模な投資案件はすべて、カナダへどのような恩恵がもたらされるかを判定するために、くわしく調べる仕組みです。投資審査はどこの国からの投資かではなく、どのような利点があるかに基づいて行われます。カナダは社会的責任があり、経済的に有益な中国の投資を歓迎しています。

思想や知識

私は思想の力を信じています。思想は社会、政治、さらには経済を動かす根本的な力であると思います。思想は現代社会の相互の交流を進める上で、中心的な役割を果たす媒体の一つであるのは確かです。日本の歴史には、思想が国家に与え得る突然の影響を示す良い例がいくつもあります。現在のグローバル・コミュニケーションの時代以前には、島国の日本では国民の経験と文化や想像力から思想が生まれることがありました。その一方で例えば、聖徳太子は飛鳥(あすか)時代に、(わざわざ遣(けん)隋使(ずいし)を送り) 統治のための思想、倫理、宗教を中国の隋(ずい)から採り入れ、日本に適合させました。

明治時代には、西洋から技術と統治のモデルを採り入れ、また第二次大戦後には、米国の助けを借りて、日本の民主主義を再設計しました。

私の見解では、中国は儒教の影響を受けた帝国支配からまだ完全に抜け切っておらず、今後もまだしばらく続くと思われます。思想の導入は、1912年の中華民国の建国、1949年の革命による中華人民共和国の建設、1979年以来進められてきた改革と開放をもって終わったわけではなく、今日もなお続いています。中国の革命はまだ終わっていないのです。

カナダ人は思想の輸出の過程の一端を担ってきました。19世紀の終わりから1949年にかけて、何千人ものカナダ人がキリスト教の布教を通して、「中国を救う」という大儀のために生涯を捧げました。全体としては、彼らの動機や熱意に商業的な目的や帝国主義的野心が混ざっていたことは明らかです。1949年に建設された中国政府は当然、このような宣教師や商人たちを帝国主義の先鋒だとみなし、

彼らを皆、追放しました。

しかし、こうした宣教師たちが宗教的な信条と共に、現代的な教育、西洋の医学、工学や科学を中国へもたらしたことは否定できません。現代的な思想の教育はキリスト教の布教と同様、中国にいる多くの西洋人にとって重要な任務になりました。

思想の流入(りゅうにゅう)は今日(こんにち)も続いています。ただし、今は中国政府の権限と管理のもとで行われています。中国は日本やその他のG8諸国から、経営管理や情報通信技術関連製品の製造法に関するアイデアを輸入しています。工学技術関連ではドイツやフランスから、金融管理では米国から採り入れています。

カナダ政府は中国に対して「考え方の輸出政策」とでも呼べるような政策を採っています。中国における開発協力プログラムは、中国

が経済成長を遂げているにもかかわらず、まだ続いています。なぜなら、私達は中国がカナダの考え方をいくつか採り入れて、お互いに恩恵がもたらされるよう望んでいるからです。

例えば、1998年にクレティエン首相と朱鎔基(しゅうようき)首相が環境協力の枠組み協定に署名し、私達は環境に優しい生産手法、資源の保存、公害の規制、天然資源と廃棄物の管理、持続可能な農業と林業、気候変動などの分野で中国と協力してきました。

またカナダは、貧困の削減、持続する経済と社会の発展という課題への中国の取り組みを支援し続けています。外交政策と草の根の両方のレベルを対象とするカナダ国際開発庁（CIDA）のプロジェクトは、運輸や農業の技術援助から母子の健康に至るまで、広い領域を扱っています。

これらはモノを供与したり、単にお金を渡すことではなく、主に知的な特性を持っています。つまり、情報や技術、問題解決の方法を分かち合うことです。採り入れたアイデアをどのように使うかは、日本がこれまでにそうしてきたように、中国人自身が決めることです。しかし、私達のアイデアが役に立たないとわかれば、こうした分野での協力の推進や継続はさせてもらえなくなります。

同様に、カナダは人権、良い統治、法の支配に関する思想や慣例を積極的に供与し続けています。例えば、カナダ国際開発庁が行っている多数のプロジェクトは、市民社会の新しい組織を支援し、刑法と刑事訴訟、二つの主な国際人権規約の批准と実施、裁判官の訓練、司法制度の利用、刑務所管理、教育と国民意識を高める活動など、多くの分野で中国の能力を高めるよう支援しています。

中国が現在また将来、どのような思想を世界に広げようとするかに

ついて考えることは興味深いことです。毛沢東(もうたくとう)の時代に中国は、革命思想の展開に最も大きな関心を持っていたようです。共産主義が西洋の思想に打ち勝つことは必然的なことであり、勝利はすぐ近いと信じられていました。1976年に毛沢東が亡くなり、四人組が逮捕されたことにより、毛沢東時代と毛沢東思想の輸出は(幸いにも)終わりを告げました。

最近、中国では倫理哲学、思想の源として、また権威主義的統治を正当化する根拠として、儒教の見直しが始まりました。カナダをはじめ、多くの国々に「孔子センター」が作られるようになりました。これは主に、中国語を教えると同時に中国文化を世界に紹介する場所を作るためです。しかし、言語や美学と共に、思想を伝える欲求が強まるのは時間の問題です。こうした思想がどのようなものかはまだわかりませんが、おそらく儒教の現代版となると思われる。

またあるいは、アートの分野で中国の知識が輸出されるかもしれません。1980年代に日本が経済的な実績と消費財の人気で国際的な注目を浴びたとき、日本は舞台芸術を世界に紹介しようとしてきました。能や狂言、歌舞伎、舞踏が世界中の舞台で見られるようになりました。ただ実際、日本の最も重要な知識の輸出は食文化でした。今日、世界中どこへ行っても、日本料理のレストランが1件もない都市はありません。ただしカナダのような国では、他のアジア系カナダ人が日本料理店を所有し経営していることが多いのですが。

私の推測では、中国が行う知識の輸出は製品規格のような分野になると思われます。すでに、中国は情報通信技術分野で規格に影響を及ぼしていますし、これは将来ますます増えると予想されます。また、中国はファッションの世界でも影響力を持つでしょう。中国は紳士服や婦人服のデザインにも大変豊かな歴史があります。将来、

皆さんの奥様がチャイナ・ドレスの日本版を着るようになっても驚かないでください。また日本と同様中国はすでに、映画やCG(シー・ジー) (コンピューター・グラフィックス) などの文化面でも影響を及ぼしています。

この地球に住む人間の観点から見ると、現に存在する最も貴重な物質は人間の脳であり、また考える能力であるということは心に留めておく価値があります。脳は人間のすべての知覚の中樞であり、知識の貯蔵庫、想像力と創造性の源です。中国人は地球全体にある脳、すなわち人類の知性の22パーセントを占めています。それを、中国人が様々(さまざま)な想像もできない方法で使うようになることは避けられません。私達カナダ人と日本人は現代史では初めて、世界に知識を与えるだけでなく、知識を受ける側に立つようになるのです。この変容は皆さんがお考えになっているよりも早く起きることでしょう。

安全保障

以上の様々な例が示しているのは、カナダと中国との関係の中心には、実利主義と相互利益の追求があったということです。この実利主義は日本と中国との関係よりもカナダと中国との関係において、より明白に見られます。なぜなら、国家の安全保障について、日本とカナダは中国に対してかなり異なる予測を立てているからです。

カナダは広大な海で中国から隔てられています。カナダは最も緊密な同盟国である米国と同じ大陸にあります。私達は中国の軍事力の台頭と、それが太平洋地域における米国の役割と存在に及ぼす影響について、懸念しています。しかし大部分のアナリストも一般国民も、中国がカナダに差し迫った脅威を与えるとは考えていません。また、カナダは日本のような20世紀にわたる歴史的な遺産を持って

いません。ですから、二国間関係が政治的色合いを帯びる度合いは、日本と中国の関係よりも少ないと言えますでしょう。

従って、カナダと中国の安全保障関係は、日本と中国の関係とはまったく異なっています。中国に対するカナダの安全保障政策の目的は、アジア太平洋地域の平和への共通な関心を高め、平和協力への参加を推進することです。

政治と軍事に関してカナダと中国の二国間関係は、閣僚級交流、政策対話、例年の艦船訪問などを通して(とおして)透明性の向上を目指しています。太平洋諸国として、また国連やASEAN地域フォーラムの一員として、カナダは軍縮、軍備管理、核拡散防止、地雷、朝鮮半島、南シナ海における主権紛争などの諸問題に関する対話を含む取組を促進しています。

ここ2、3年の間に、カナダと中国の二国間軍事関係には幾つかの進展が見られました。カナダの軍人が中国主催のASEAN地域フォーラムの外務・軍事専門家養成プログラムや、人民解放軍（PLA）の国防大学で行われたアジア安全保障に関するセミナーに参加してきました。多国間協調や地域安全保障に関するセミナーも定期的に行われているほか、平和維持、寒冷気候訓練、後方支援に関する両軍の対話も行われています。

もちろん、私達は中国の軍事力の高まりを注意深く見守っています。これは北京のカナダ大使館付き武官を通して、また日本などの近隣地域の政府と非公式の討議を通して行っています。また、中国の軍事予算や軍事理論、戦略的意図の透明性の欠如に関する懸念を公（おおやけ）に表し（あらわし）ています。

しかしながら、距離が遠いためと、一般国民に知識が不足している

ために、中国の台頭が安全保障に及ぼす影響については、まだカナダでは日本ほど政治的に慎重な対応が求められる問題にまで発展していません。

人権

カナダ人は人権についての基本原理を信奉しています。

私達カナダ人は、人権は普遍的なものであると確信しており、国民も、またどの時代の政府も、人権に対する組織化された侵害は自然の秩序に反するものと考えています。このような考えは、政治レベルでも個人レベルでも、中国との関係を複雑なものにしています。

中国はこれまでも、そしてこれからも、私たちの価値観に異論を唱え続けるでしょうし、過去にそのような記録があります。カナダ

は、人権や法の支配が大部分、力によって押しえつけられた文化大革命の名残(なごり)がまだ見られる中、中国と1970年に外交関係を樹立しました。1980年代には、天安門事件によって両国の関係が損なわれ、1990年代になると、カナダは97年の香港返還の影響を恐れた何万人もの移民を香港から受け入れました。

カナダと中国が異なる価値観を持つことは、どのような意味を持つのでしょうか。法の支配に関する異なる見解から、例えば、契約の尊重、知的所有権を含む私有財産の保護、商業関係における法律や前例、透明性に基づく予測可能性などの問題が生じます。

しかし、人権問題、すなわち言論や集会の自由や、裁判制度の独断的、政治的乱用からの自由という問題になると、カナダと中国の間に緊張が生じるのは、実際的な問題だけでなく、心理的な問題がかかっているからです。カナダ人は、中国人も自分達と同じ人間であ

り、自分達と同様、人権を持っていると考えています。しかし、中国共産党は、国民の第一の責任は、国家に奉仕することであると考えています。

カナダは、政治的なレベルでの交流、カナダ国際開発庁のプログラム、国際会議などを通して、中国における人権尊重の向上を強く提唱しています。

何らかの進歩を遂げているかどうかについては、異なる意見があります。確かに、今日の中国では人権の乱用がよく見られます。進歩を示す唯一の目安は、中国的な特徴はあるにせよ、十分に成熟した民主主義政権への移行であると考えている人もいます。

それが長期的な目標であることに、違いはありません。

しかし、その目標は時間をかけ紆余曲折を経て、少しずつ達成するしかないというのが私の個人的な見解です。カナダを含む各国政府は、公式・非公式を問わず、中国と積極的に対話を重ねていかなければなりません。たとえ、ときにはこうした対話が非生産的に思えることがあったとしてもです。

政府や中国共産党、中国社会の中には、私達が考えているよりも多くの人権支持者がいます。カナダはそのような人々に、反対意見を許さない当局の強硬派と議論するためのアイデアや、人権論争に役立つ原則や規範を提供する方法を作り出す必要があります。

カナダと日本、EUやその他の諸国は中国当局と関係を築くときに、人権の尊重に対しては報酬を与えて支援を強化するだけでなく、人権の抑圧に対しては、支援を失うなどの高い代償を払わせるようにしています。

そのようにしても、彼らが弾圧をしなくなるという意味ではありません。事実、

つい最近、著名なエイズ活動家が逮捕されました。しかし、人権尊重の原則や規範は必ず中国の社会に根を下ろしていくはずで

中国における人権活動が中国共産党の人権に対する基本的な姿勢をすぐに変えることはありません。これは残念なことかもしれませんが、実際に人権思想がどれほど行き渡っているかという判断基準は他(ほか)にあります。それは、ますます顕著になっている自由の高まりと法の支配を求める声です。それこそが本当の進歩を計る物差しです。政府や共産党の内部にいる人だけでなく、外部の人間も、民主主義と法の支配の担い手なのです。

まとめ

最後になりますが、2008年は、現在と将来の中国を理解する又と
ない出発点になると思います。なぜなら、中国は環境問題、貧富の
差、汚職などの大きな問題を抱える一方で、今年は祝うべきものが
たくさんあると国民は考えているからです。

中国や中国人と関わる時には、中国の歴史の広さと深さ、また中
国が哲学や宗教、芸術に与えた計り知れない影響を認め、世界有数
の文明を発達させた数千年(すうせんねん)にわたる努力の成果に敬意を
払うことをお薦め致します。

これからの2年間、中国は世界の注目を浴びます。第一に、今年の
夏に迫った北京オリンピック、次に2010年の上海万博です。この期
間中、中国の長所も短所もテレビや新聞、雑誌を通して私たちの目
に明らかにされることは間違いありません。また、自分の目で確か

めるために、多くの人が中国へ向かいます。

今後2年間は、中国のありのままの姿を見極める絶好の機会となります。まだ超大国とは言えず、問題が山積している国ではありますが、中国の社会は計り知れないエネルギーと活力、目的に邁進する決意を明確に示しています。

この期間は、中国が今まで達成した実績を称える良い機会です。

また、こうした実績が中国の将来にとって、そして私達にとってどのような意味を持つか、曇りのない目で見極める良い機会でもあるのです。

ご静聴、ありがとうございました。

ジョゼフ・キャロン

2008年1月28日